

ヨハネによる福音書13章12節－20節
「愛の模範」

《I》

主イエス・キリストが弟子たちの足を洗われる。この洗足の出来事を前回から見ています。

洗足、これは主が弟子たちを愛し抜かれて行われた、愛の業です。

この「愛し抜かれた」という個所は、ギリシア語の直訳では、「目的に到るまで」愛された、となります。

何が目的なのか、という、いろいろな言い方ができるかと思いますが、まず十字架です。それから、復活、昇天、さらに聖霊降臨があります。

そして現在は、父なる神さまの右におられて私たちのために執り成してください、また主の御霊をもって私たちを絶えず守ってくださっていること。そして遂には、最後の時を迎えること。終わりの裁きの時です。それは、信じる私たちにとっては、救いの完成する日ですね。

私たちが、このような目的へと至るように。そのように私たちを愛して下さっています。キリストの愛が、一人一人において貫かれています。

ですから、弟子たちの足を洗われたということも、十字架へ向けての愛です。また、復活から昇天を経て、先ほど述べたように、私たちの救いの完成に至るまでの、すべての歩み・歴史を覆って現されている、主イエス・キリストの愛です。

この愛に、私たちは生かされている！ まず、このことを改めて覚えて、驚き、感謝したい、と思います。

この愛は、十字架の愛は、――神の独り子が、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執されず、かえって自分を無とされ、僕の身分となられて、私たちのところへと来てくださった、という、ふつうは考えられないような出来事をもって、裏付けられている愛です。

私たちは、もし聖書を知らなければ、“神”ということで、どのようなことを考えたでしょうか？

それは、遠くにおいて、思いのままに人間に罰を与えたり、褒美を与えたり、好き勝手なことをするもの。何を考えているかわからないので、昔から行われている祭儀を、意味も分からずに行っていれば、まあ大丈夫だろうと思っているもの、といったところでしょうか。

しかし、聖書の神さまは違います。人間の姿になられて、私たちが生きているその所で、共に生きてくださいました。それは私たちを愛して下さっているのです、遠く離れた所から、ただ見ているだけ、などということではできなかったからです。

そして、私たちが生きる中で経験する、あらゆる悩みや苦しみ、悲しみを、神さまは文字どおり、私たちと共にしてくださいました。

そして、その悩み、苦しみ、悲しみに打ち勝つ愛をもって、私たちを光へと導かれ、そしてまことの命に生きるようにと、招いて下さっています。

神さまの御心は一つ。私たちへの愛です。そして、神さまの御心は誰でも聖書を通して、はっきりと知ることができる。聖書のうちに立ち現れてくる主イエス・キリストにおいて、神さまの愛をはっきりと知ることができます。

その愛が今、明日には十字架にかけられることとなるこの時、示されています。

僕として、まさに僕が行うべき卑しい仕事である洗足を、主は進んで行ってくださいました。

この愛の業は、十字架において完全な形で実現され、さらに復活から世の終わりに到るまでをきっちりと貫く、神さまの愛です。

私たちを愛してくださり、私たちのために、その救いのために、ご自身を限りなく低くしてくださる主イエス・キリストにあつて、私たちは初めて、確実な、揺らぐことのない命に生きる者とされます。

主はこれほどまでの愛をもって、私たちに向かい、この愛によって生きるようにと、招いてくださっています。

信仰をもって生きるか、否か。これは、絶対的で、まさに天と地以上に懸け離れた違いをもたらします。

主イエス・キリストは十字架においてご自身の命をかけて、私たちに信仰に生きるようにと、招いてくださっています。この招きを、決して無為に聞き過すようであつては、なりません。

《2》

主イエス・キリストはこのようにして、どのような愛をもって弟子たち、そして私たちに愛し抜かれていたのか。このことを足を洗われることによって示されると、再び席に着かれました。

そして、言われます。13節以下、15節まで、長いですが再び読みましょう。

「あなたがたは私を『先生』とか『主』と呼ぶ。そのように言うのは正しい。私はそうである。ところで、主であり、師である私があるがたの足を洗ったのだから、あなたがたも互いに足を洗い合わなければならない。私があるがたにしたとおりに、あなたがたもするようにと、模範を示したのである」。

師である私、というように「師、先生」とあります。私たちは今、イエスさまのことを師と呼ぶことは、実際にはあまりないか、と思います。

しかし、この言い方は、大切なところで用いられた歴史があります。ルターの95か条の提題があります。その第1条で、ルターはこう述べます。

「我々の主であり、師でありたもうイエス・キリストが「悔い改めよ、云々」と言われたときに、彼は信仰者の全生涯が悔い改めの行為でなければならない、ということの意味されたのである」。

宗教改革は勿論、何もなかったところからルターによって突然、始められたものではありません。それまでにも先駆的な改革者たちがおり、宗教改革へと向かう機運は広く、高まっていたと言えます。それでも、決定的に宗教改革へと踏み出したのはルターであり、その起爆剤となったのが95か条の提題です。

その提題の第1条に、「主であり、師であるイエス・キリスト」という言葉が使われている、ということは、少し大袈裟になるかもしれませんが、この言葉こそ宗教改革の始まりを告げる早鐘であつた、と言ってよいかもしれません。

さて、主はご自身から弟子たちの足を洗われたのは、弟子たちも同じように、互いに足を洗い合うためである。あなたがたもそうするようにと、私は模範を示したのだ、と言われます。

模範です。私たちに模範に倣うように（足を洗い合うように）と言われます。それで、今朝の説教題も「愛の模範」としました。

しかし、これはこの言葉だけから考えていくと、ある種の誤解を招きかねないことかもしれません。

なぜなら、ふつう模範というのは、それを見て同じように真似をするためのお手本ということでしょう。

しかし、罪深い私たちが、そもそもイエスさまを模範、お手本とすることなど、できるのでしょうか。——形だけなら、できるかもしれない。しかし、そういうことではないでしょう。

そもそもここで、模範とすべきことは何なのか？ それは足を洗う（洗い合う）ということですね。それは、直接的にそのこと自体を指すこともあるでしょうが、より広く、その行為に現れていること、——つまり、それほどまでに自らを低くする“謙遜”ではないか、となるでしょう。

このことは誤りではないでしょうが、謙遜ということが独り歩きしてしまう恐れがある。そうではないでしょうか？

私たちは謙遜にならなければならぬ。だから、謙遜に見えるように振る舞おう。謙遜でない者は、とちめてやろう…。

朝日新聞の一面に毎日載る、小さなコラム欄（折々のことば）がありますが、昨日、このようなことが書かれていました（原文どおりではないですが）。——謙遜でない者に、謙遜になれば、と大声で叱責するのは矛盾している、ということ。——全くその通りです。これでは話になりません。

まことの謙遜は本当に難しい。うわべだけの・作られた、わざとらしい謙遜を人はすぐ見抜きますし、それを嫌います。

考えてみると、人には、うわべだけの謙遜によって隠そうとする、二つの性質があるのではないか、と思います。

一方では僻みや妬み、劣等感など。これを見破られないように、私はそういうことなど何も気にしていませんというように、謙遜を見せようとする。

他方では、妬みなどの逆になりますが、自信過剰で、高慢な思いです。思い上がりを隠すために、殊更に謙遜ぶる。

これらは結局、人の目を気にしているということでしょう。人からああだこうだと言われるのが嫌で、面倒くさいから、謙遜の振りをする。

本当の謙遜は、そういうことではないですね。人の前で、人の目を気にして低くなることではない。——神さまの御前で、神さまの目を畏れて、低くなることです。そうでなければ、謙遜ではないでしょう。

主イエス・キリストは、私たちが救われて、まことの命に生かされるため、ご自身低くなられて、十字架を忍ばれるまでの謙遜の限りを尽くされました。

その模範に私たちが倣うということは、十字架の愛を前にして、私たちが心砕かれ、みずからを低くして、主に従う。御言葉に聴き従い、御霊の導きと助けを祈り求める、ということのはずです。

そのような中で、いわゆる謙遜は本物になるのではないのでしょうか。

それ以外のところで、——つまり主イエス・キリストを離れて。主の十字架をどこかへやってしまった中で、——謙遜に振る舞おうとしても、それはただ、いわゆる道徳の時間などに教えられる謙遜、ということになるでしょう。

ですから、人に向かって、謙遜になれば、と怒鳴ることは起こりえると思いますよ。

しかし、十字架の愛のもとで謙遜になるとき、そのようなことは起こりえません、本当に神さまの御前に自分を低くしているなら。

人が謙遜でなくても、怒るのではなく、ああ、この人はまだ神さまの愛を知らないのだな、十字架の愛に生かされていないのだな、と思って、その人のために祈る、というようになるでしょう。

主イエス・キリストが「模範」と言われることの意味は、そのようなことです。

«3»

そのような模範に倣って、私たち兄弟姉妹が愛し合う。兄弟愛を尽くす。

そのとき私たちは、一つ教会において生かされる、兄弟姉妹です。主イエス・キリストにあって一つである、まことの兄弟姉妹となります。

最後にヨハネの手紙一 4章20、21節を読んで終わりにします。

「『神を愛している』と言いつつながら兄弟を憎む者がいれば、それは偽り者です。目に見える兄弟を愛さない者は、目に見えない神を愛することができません。神を愛する人は、兄弟をも愛すべきです。これが神から受けた掟です。」

恵みと憐れみに富みたもう天の父なる神さま、尊い御名を崇めます。

主は十字架を一つの頂点とするまでの深く、大きな愛をもって、私たちに今、この愛に生きようと招いてくださっています。尊い恵みを感謝します。

主が私たちの救いのために謙遜の限りを尽くされたように、私たちも主に倣い、主の御前で心砕かれ、謙遜な者とされて、心から主に従いゆく者とされますように。

主を模範とするには、あまりに罪深く、汚れた者ですが、どうか御霊がいよいよ私たちを清め、少しでも御旨に適う者として、立ち上がらせてください。

御手に委ねて、主イエス・キリストの御名によって祈ります。

大場康司